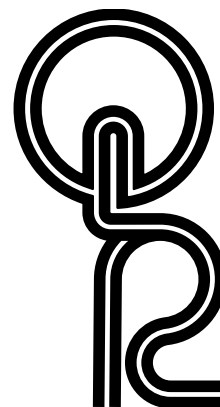


# QR Newsletter



## 第四紀通信

Vol. 15 No.6, 2008



2008年大会巡検のひとつ。千葉県飯岡台地の香取層露頭(三崎町:Stop 6)。下位から外浜~前浜~後浜堆積物と湿地泥層からなる。詳細は本文参照。(荒谷 忠氏撮影)

---

Vol. 15 No. 6

December 1, 2008

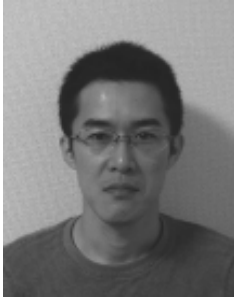
---

2008年論文賞・奨励賞	2	改訂・新設された規約	12
シンポジウム案内	3	講習会案内	14
学会賞・学術賞受賞記念講演案内	4	編集委員会からのお知らせ	15
学会賞等の推薦募集	5	幹事会議事録	16
学会賞等の規定	6	紙碑	17
2008年大会巡検報告	9	寒冷地形談話会例会のお知らせ	19
シンポジウム報告	11	会員消息	19
PIGS ワークショップ報告	11	深田研談話会のお知らせ	20

---

## 2008年論文賞・奨励賞

<受賞者の言葉>



澤井祐紀氏

このたびは、第四紀学会論文賞・奨励賞をいただき誠にありがとうございます。

本論は、私が大学の学部生のころから継続して行ってきた研究を総説としてまとめたものです。研究を遂行する際には、北海道厚岸町の「厚岸湖・別寒辺牛湿原学術研究奨励補助金」を受け、厚岸水鳥観察館のスタッフや厚岸町役場の方々に調査を支えていただきました。論文を発表する際には、九州大学の鹿島 薫助教授、名古屋大学の北川弘之教授、米国地質調査所のBrian Atwater博士、東京大学の佐竹健治教授をはじめとする多くの方々から多大な助言を賜りました。また、現所属である産業技術総合研究所やポストクとしてお世話になった国際日本文化研究センターでは、常に紳士的な討論や助言を頂ける上司、先輩、同僚に恵まれ、研究を発展させることができました。記して感謝の意を表します。

本研究は、珪藻化石を用いた相対的海水準変動の復元方法を応用し、後期完新世における千島海溝南部の地殻変動を論じたものです。北海道東部太平洋沿岸において十年スケールの測地観測(沈降)と数千~数万年スケールの地質学的事実(隆起)に相反する傾向が見られること

は1970年代に指摘されてきました。この問題は長く解かれることがありませんでしたが、本研究の過程でその一部を説明することができました。

この研究が遂行できたのは、多くの研究者との交流によるところが大きいと思っています。まず、1998年~1999年に米国地質調査所のBrian Atwater博士を中心とした研究チームが組織され、北海道東部における海溝型古地震と地殻変動の問題が論じられるきっかけとなりました。米国では1980年代半ばから塩性湿地の堆積物から海水準変動を復元し、そこから海溝型地震に関係した地殻変動を議論することが盛んでしたが、この分野における当時の日本ははっきり言えば大きく遅れていたと思います。私は、卒業論文、修士論文、博士論文のテーマとして、1995年から同地域における後期完新世の相対的海水準変動の復元に取り組んでいましたが、幸運にも彼らの研究調査隊に参加することができ、それを機に彼らのノウハウを学ぶことができました。さらに、ポストク時代に英国人研究者らと行った定量的な海水準復元方法は、それまで定性的な議論に留まっていた珪藻分析から一歩進んだ解釈を行うことができ、地殻変動復元に貢献してくれました。これらの技術的な工夫に加えて、産業技術総合研究所の七山 太博士や佐竹健治博士(現・東京大学)を中心とする研究グループが同地域で古津波の研究を進めていたことも、海水準変動と海溝型地震を論じるのに重要でした。

多くの研究者からの助言、サポートにより何とか研究を遂行してきましたが、まだまだ多くの課題が残されています。このたびの受賞を励みに、さらに研究を発展させていきたいと思えます。

## 日本第四紀学会主催シンポジウム 「東アジアへの新人の拡散と OIS3 の日本列島」のお知らせ

下記のような内容で、第四紀学会主催のシンポジウムが行われます。参加費は無料で、事前登録は必要ありません（ただし、講演要旨集は有料となる可能性あり）。また、当日午前中、同じ会場で第四紀学会の第1回学会賞・学術賞講演会が、隣接する会場で評議員会が開催されます。

各講演のタイトルや時間配分などは変更になる場合があります、詳細は第四紀学会ホームページなどでお伝えします。

日時：2009年2月7日(土) 13:30 - 17:00

場所：首都大学東京（南大沢キャンパス）

八王子市南大沢1-1 5号館（旧人文棟）地下1階大会議室

趣旨：OIS3の中頃は、西アジアを経由してヨーロッパとアジアへ新人が拡散した時期と一致する。東アジアへの新人の拡散はどのようなであったのか、またそれは日本列島への人類の最初の居住問題とどのようにリンクするのか。40 - 30kaの日本列島に残された考古学的な証拠（石器の製作技法、遺構、集落、新しい資源の開発、など）は東アジア世界でみても大きな特色がある。その具体相の解明とともに、成果を新人の世界拡散の流れの中に位置づけていくことが必要である。本シンポジウムでは、東アジアへの新人の拡散問題と、関連する考古学的な証拠をレビューし、それを踏まえて特徴的な事例ならびに人類の活動の舞台である地形面の問題について議論する。

### プログラム（案）

13:30 - 13:45 趣旨説明（小野 昭）

13:45 - 14:15 後期更新世の東アジアにおけるホモ・サピエンスの拡散（海部陽介）

14:15 - 14:45 日本列島の“行動的現代人”の出現の証拠とその理解（出穂雅実）

14:45 - 14:55 休憩

14:55 - 15:25 日本列島各地のステージ3の地形面はどこにあるか（久保純子）

15:25 - 15:55 黒曜石利用のパイオニア期と環状のムラの消滅（島田和高）

15:55 - 16:25 同位体ステージ3の環境を拓いた石斧（堤 隆）

16:25 - 17:00 討論

世話人：小野 昭（首都大学東京）・諏訪 順（小田原市教育委員会）

問合せ先：小野 昭 首都大学東京大学院人文科学研究科

〒192-0397 東京都八王子市南大沢1-1 Tel.042-677-2121, Fax.042-677-2112

## 2008年度学会賞・学術賞受賞者講演会のお知らせ

日本第四紀学会では、第四紀学の発展に貢献し顕著な業績をあげ、また学会活動に貢献した会員に授与される学会賞、第四紀学に貢献した優れた学術業績をあげた会員に授与される学術賞を新しく設け、2008年大会時に最初の受賞者を決定しました。各受賞者のお名前や受賞内容については、第四紀通信の前号に掲載されています。今後、受賞者の受賞記念講演会を2回に分けて行う予定であり、第1回目の講演会を下記のとおり実施します。参加費は無料で事前登録は必要ありません。非会員の方も受講できます。なお同日午後には同じ会場にて第四紀学会主催のシンポジウム「東アジアへの新人の拡散とOIS3の日本列島」が開催されます。本講演会に関する問い合わせは、担当幹事：水野清秀(FAX:029-861-3653、E-mail:k4-mizuno(at)aist.go.jp)までお願いします。

2008年度日本第四紀学会賞・学術賞受賞者講演会（第1回）

日時：2009年2月7日（土）10：00～11：30

場所：八王子市南大沢 首都大学東京 南大沢キャンパス  
（京王相模原線「南大沢」駅下車，徒歩5分）

5号館地下1階 大会議室

プログラム、講演者と講演タイトル

10：00～10：10 あいさつ

10：10～10：50 大場忠道氏（学会賞受賞者）

「海底コア中の有孔虫化石の酸素・炭素同位体比を駆使した第四紀古海洋環境に関する一連の研究」

10：50～11：30 五十嵐八枝子氏（学術賞受賞者）

「化石花粉から見た北海道とサハリンの最終氷期と後氷期における環境変遷」

## 第四紀学会「学会賞」と「学術賞」の候補者推薦の募集について

昨年から新設されました「日本第四紀学会賞」(以下「学会賞」と「日本第四紀学会学術賞」(以下「学術賞」)の受賞候補者の推薦受付を開始いたします。両賞は来年6月末日までに、学会賞受賞候補者選考委員会が、推薦された候補者の中から、受賞候補者を選考し、評議員会において受賞者が決定され、2009年総会で表彰される予定です。

「学会賞」：第四紀学の発展に貢献した顕著な業績や活動及び学会活動に貢献した正会員に授与。学会における最高の賞。毎年若干名。

「学術賞」：第四紀学に貢献した優れた学術業績をあげた正会員に授与。優れた編書、著書、論文などの一連の業績が対象。対象成果が複数の著者(研究グループ等を含む)によりなされた場合は、筆頭著者または代表者に授与。毎年若干名。

つきましては、下記及び本号に掲載しました「日本第四紀学会学会賞規定」及び「日本第四紀学会学術賞と学術賞選考に関する内規」をご参照の上、「学会賞」及び「学術賞」の候補者をご推薦いただきますよう、会員各位にお願い申し上げます。

1. 推薦書類：推薦書類には、推薦者名(自薦を含む)、賞の名称、「学会賞」の場合には候補者名及び具体的な業績や活動内容を示した受賞件名と推薦理由を、「学術賞」の場合には候補者名及び受賞の対象となる一連の業績を含めた受賞件名と推薦理由を記入する。
2. 推薦書類の提出先：  
〒162-0041 東京都新宿区早稲田鶴巻町519 洛陽ビル3階  
日本第四紀学会 学会賞受賞候補者選考委員会 宛
3. 推薦書類の受理期限 2009年3月31日(必着)

## 第四紀研究「論文賞」と「奨励賞」候補論文推薦の募集について

今年度の「論文賞」と「奨励賞」の推薦を下記のとおり受け付けます。これらの賞は、規定により、会員の皆様から自薦・他薦によって候補論文と候補者をご推薦いただき、論文賞受賞候補選考委員会において受賞候補論文・受賞候補者の選考を6月末日までに行います。受賞論文と受賞者は、来年6月頃に開催予定の評議員会において決定され、2009年総会で表彰される予定です。

「論文賞」：会員を含む論文著者全員に授与。毎年1-2件程度。対象は、掲載された全て論文(短報を含む)。

「奨励賞」：会員である筆頭著者に授与。年齢は選考年の4月1日で35歳以下。毎年1-2件程度。

つきましては、下記及び本号に掲載しました「日本第四紀学会学会賞規定」及び「日本第四紀学会論文賞と奨励賞選考に関する内規」をご参照の上、「論文賞」の候補論文と「奨励賞」の候補者をご推薦いただきますよう、会員各位にお願い申し上げます。

1. 選考対象：「第四紀研究」第46巻(2007年)及び第47巻(2008年)に掲載された論説、短報、総説、資料、講座及び特集号の論文。「論文賞」の場合には、著者に会員が含まれることが必要。「奨励賞」の場合には、筆頭著者が会員であること。
2. 推薦書類：推薦書類には、推薦者名(自薦を含む)、賞の名称、「論文賞」の場合には全著者名と候補論文名(巻号頁を明記)及び推薦理由を、「奨励賞」の場合には候補者名と推薦論文名(巻号頁を明記)及び推薦理由を記入する。
3. 推薦書類の提出先：  
〒162-0041 東京都新宿区早稲田鶴巻町519 洛陽ビル3階  
日本第四紀学会 論文賞受賞候補者選考委員会 宛
4. 推薦書類の受理期限 2009年3月31日(必着)

## 日本第四紀学会 学会賞規定

(1994年8月26日、評議員会・8月27日、総会にて決定)  
(1997年8月6日、総会にて一部改正)  
(2006年8月4日、評議員会にて一部改正)  
(2007年2月3日、評議員会にて一部改正)  
(2008年8月22日、評議員会にて一部改正)

### [ 目的 ]

第1条 本規定は日本第四紀学会会則第3条3項に基づき、第四紀学の発展に貢献する優れた業績をあげた会員等の表彰に係わる事項を定める。

### [ 章の名称 ]

第2条 本学会に、日本第四紀学会賞、日本第四紀学会学術賞、日本第四紀学会功労賞、日本第四紀学会論文賞及び日本第四紀学会奨励賞（以下「学会賞」、「学術賞」、「功労賞」、「論文賞」及び「奨励賞」と略称する）を設ける。

### [ 受賞の対象 ]

第3条 学会賞は、第四紀学の発展に貢献した顕著な業績や活動、及び学会活動に貢献した正会員に授与し、学会における最高の賞とする。学術賞は、第四紀学に貢献した優れた学術業績をあげた正会員に授与する。功労賞は、第四紀学の発展や学会活動に貢献した個人や団体、組織に授与する。論文賞及び奨励賞は、会誌「第四紀研究」に掲載された第四紀学の発展や進歩に貢献する優れた論文を発表した会員である著者に授与する。奨励賞は若手研究者の育成と研究奨励に寄与することを目的とする。

### [ 受賞者の選考 ]

#### (学会賞と学術賞)

第4条 学会賞及び学術賞候補者を選考するため、学会賞受賞者選考委員会（以下「学会賞選考委員会」と略称する）をおく。

第5条 学会賞選考委員会は、評議員の投票により選出された評議員経験が2期以上の5名の会員からなる学会賞選考委員で構成し、学会賞選考委員の互選により学会賞選考委員長をおく。学会賞選考委員の任期は1年とし、3期以上連続して就任できない。

第6条 本学会会員は、学会賞選考委員会に対して学会賞及び学術賞受賞候補者を推薦することができる。

第7条 学会賞選考委員会は毎年6月30日までに選考を終了し、受賞候補者を会長に答申する。学会賞選考委員会は必要に応じて参考人から意見を聴取することができる。

#### (功労賞)

第8条 功労賞の選考は、幹事会にて行い、評議員会に候補者を推薦する。

#### (論文賞と奨励賞)

第9条 論文賞及び奨励賞受賞候補者を選考するため、論文賞受賞者選考委員会（以下「論文賞選考委員会」と略称する）をおく。

第10条 論文賞選考委員会は、評議員の投票により選出された5名の論文賞選考委員で構成し、論文賞選考委員の互選により論文賞選考委員長をおく。論文賞選考委員の任期は1年とし、連続して論文賞選考委員に就任することはできない。

第11条 本学会会員は、論文賞選考委員会に対して論文賞及び奨励賞受賞候補者を推薦することができる。

第12条 論文賞選考委員会は毎年6月30日までに選考を終了し、受賞候補者を会長に答申する。論文賞選考委員会は必要に応じて参考人から意見を聴取することができる。

### [ 受賞者の決定 ]

第13条 評議員会は、学会賞選考委員会、幹事会及び論文賞選考委員会から推薦された受賞候補者をもとに、受賞者を決定する。

### [ 選考結果の報告 ]

第14条 学会賞選考委員長、幹事長及び論文賞選考委員長は、評議員会の結果を踏まえて受賞者の選考経過と結果を総会に報告する。

## [ 授賞式 ]

第15条 授賞式は総会で行い、学会賞、学術賞、功労賞及び論文賞受賞者へは賞状を、奨励賞受賞者へは賞状及び副賞 賞金 を授与する。

## [ その他 ]

第16条 本規定に定めるもののほか、学会賞に係わる必要事項は内規として評議員会が別に定める。

## [ 規定の変更 ]

第17条 本規定の変更には評議員会の承認を必要とする。

## [ 規定の施行 ]

第18条 本規定は2008年9月1日から施行する。

## 日本第四紀学会 論文賞と奨励賞選考に関する内規

(1994年8月26日、評議員会・8月27日、総会にて決定)  
 (1995年1月28日、評議員会にて一部改正)  
 (1997年8月6日、総会にて一部改正)  
 (1999年1月30日、評議員会にて一部改正)  
 (2006年8月4日、評議員会にて一部改正)  
 (2007年2月3日、評議員会にて一部改正)

1. 選考の対象は、授与年の前々年及び前年の2年間(2巻分)の第四紀研究に発表された論説、短報、総説、資料、講座及び特集号の論文とする。奨励賞については、選考が行われる当該年の4月1日現在で、会員である35歳以下の筆頭著者の論文を対象とする。すでに奨励賞を受賞したことがある筆頭著者の論文は、奨励賞の対象とならない。
2. 論文賞と奨励賞の授与は原則として毎年とし、受賞論文数は論文賞が1-2編程度、奨励賞が2編程度とする。
3. 論文賞受賞論文が複数の著者(研究グループ等を含む)により執筆されたものである場合には、執筆者一同に論文賞を授与する。奨励賞については会員である筆頭著者に授与する。同一論文が、論文賞と奨励賞の候補となった場合には、論文賞を優先する。ただし、奨励賞受賞候補者であることを選考結果報告に記載し、評議員会で論文賞が授与された際は、奨励賞の副賞も授与する。また評議員会で論文賞が授与されなかった場合は、奨励賞候補者として評議員会で審議する。
4. 論文賞選考委員は、会長が専門分野を付記して推薦した10名以上の正会員の中から、評議員の投票により選出される。得票数が同数のときは、専門分野の委員数が少ない者を委員とする。専門分野の委員数も同数の場合は、年長順とする。
5. 論文賞選考委員が受賞候補者となった場合には、賞の選考に関与しないこととする。
6. 論文賞選考委員に欠員が生じた場合は、次点者を補充する。
7. 論文賞と奨励賞の選考に当たっては、論文の独創性、将来の発展性、総合性や重要な発見などを選考の基準とする。
8. 受賞候補者の推薦書類は、授与年の3月末日までに日本第四紀学会論文賞選考委員会宛てに提出する。
9. 受賞候補者の推薦書類には次の事項を記入する。賞の名称、推薦者名(自薦を含む)、受賞候補者名、受賞候補論文名(巻号頁を含む)及び推薦理由。
10. 会長は第四紀通信に論文賞と奨励賞の受賞候補者の推薦募集に関する記事を掲載する。
11. 論文賞選考委員長は第四紀通信に評議員会で決定した受賞者と受賞理由を発表する。
12. 本内規の変更には評議員会の承認を必要とする。
13. 本内規は、2007年8月1日から施行する。

## 日本第四紀学会 学会賞と学術賞選考に関する内規

(2007年2月3日、評議員会にて決定)  
(2008年8月22日、評議員会にて一部改正)

1. 学会賞は、第四紀学の発展に貢献した顕著な業績や活動及び学会活動に貢献した正会員に授与する。
2. 学術賞は、第四紀学の発展に貢献した優れた学術業績をあげた正会員に授与する。優れた編書・著書・論文などの一連の業績を対象とする。
3. 学会賞と学術賞の授与は、原則として毎年とし、それぞれ若干名とする。
4. 学術賞の対象成果が、複数の著者・研究グループ等を含む によりなされたものである場合には、筆頭著者または代表者に学術賞を授与する。
5. 学会賞選考委員は、会長が専門分野を付記して推薦した10名以上の正会員のなかから、評議員の投票により選出される。得票数が同数のときは、専門分野の委員数が少ない者を委員とする。専門分野の委員数も同数の場合は、年長順とする。選挙の際には、分野を考慮した選挙を行うため、各分野からの候補者、過去3年間の学会賞選考委員会の名簿を明示する。なお、学会賞選考委員の任期は1年とし、3期以上連続して就任できない。
6. 学会賞選考委員が受賞候補者となった場合には、賞の選考に関与しないこととする。
7. 学会賞選考委員に欠員が生じた場合は、次点者を補充する。
8. 受賞候補者の推薦書類は、授与年の3月末日までに日本第四紀学会学会賞選考委員会宛てに提出する。
9. 受賞候補者の推薦書類には次の事項を記入する。賞の名称、推薦者名(自薦を含む)、受賞候補者名、受賞件名及び推薦理由。
10. 会長は第四紀通信に学会賞と学術賞の受賞候補者の推薦募集に関する記事を掲載する。
11. 学会賞選考委員会は、授与年の3月末日までに届いた自薦と他薦及び評議員から推薦された候補者の中から受賞候補者を選考し、会長に答申する。また、学会賞選考委員長は、評議員会と総会において、選考経過と結果を報告する。
12. 学会賞選考委員長は第四紀通信に評議員会で決定した受賞者と受賞理由を報告する。
13. 学会賞と学術賞の選考において、受賞候補者が、当該年の論文賞の受賞候補者となっても、双方の賞の妨げとしない。
14. 本内規の変更には評議員会の承認を必要とする。
15. 本内規は、2008年9月1日から施行する。



## 2008年日本第四紀学会巡検参加報告

荒谷 忠 (応用地質株式会社)

日本第四紀学会2008年大会巡検は「関東東部沿岸域の地質・地形・人間活動」と題して、8月25日・26日の2日間にわたり開催された。その概要を報告させていただく。なお、個人的興味の違いから、話題が堆積・地層に寄ることをあらかじめお断りしておく。

この巡検は、第四紀地形地質から人文地理・考古学まで幅広い話題提供・問題提起を含む内容となっている。関東平野東部沿岸地域の地形、層序編年、堆積相・シーケンス層序といった第四紀の来歴の記録が、テクトニクス、古環境変遷、現世地形・堆積作用といった背景・過程に関連付けられ、自然環境と人間活動の関係性が語られる - といった目論見である。参加者は三十余名、大学学部生から大ベテランまで、学生・研究者から会社員まで様々であった。

観察地点は以下の通り。

## (第1日)

Stop 1: 台地と浜堤平野の地形 (千葉県東金市 福俵)

Stop 2: 現世海浜地形 (九十九里町作田)

Stop 3: 沖積層海浜堆積物コア (同)

Stop 4: 片貝の漁村景観 (九十九里町作田)

Stop 5: 犬吠層群小浜層テフラ (銚子市三崎町 屏風ヶ浦海崖)

Stop 6: 更新統香取層の海浜堆積物 (銚子市三崎町キャベツ畑露頭)

Stop 7: 犬吠層群豊里層テフラ (旭市清滝露頭)  
- 宿舎にて小林洋二先生講義「科学から空想へ - 房総はどうして半島になり得たか」

## (第2日)

Stop 8: 常陸台地地域のバリアー島システム (鹿嶋市武井露頭)

Stop 9: 下総層群の堆積環境と貝化石密集層 (銚子市阿玉露頭)

Stop 10: 霞ヶ浦環境科学センターと周辺地形

Stop 11: 古東京湾の化石カキ礁 (かずみがうら市崎浜露頭)

Stop 12: 上高津貝塚と穴塚大池 (土浦市上高津、穴塚)

以下、個人的に興味を持った話題を2つ取り上げ、巡検の状況や独断の感想を述べる。

## 【九十九里浜】

日本の海岸平野のひとつの典型ともいえる九十九里浜 (写真1) で、現世の砂浜～浅海で地形と堆積物を観察し、浜堤平野の地形と堆積物の形成を学んだのであった。岡崎浩子さん [千葉県立中央博] と田村 亨さん [産総研] から地形と堆積物に関する総論的解説が、清家弘

治さん [東京大] から前浜に特徴的な生痕 *Macaronichnus segregatis* とその形成者 *Euzonus* に関する丁寧な解説があった。九十九里浜平野では産総研が優れた調査を行っており、巡検ではその沖積層コアの観察会も催された (写真2)。また、続いて訪れた飯岡海岸・屏風ヶ浦 (ここでは中里裕臣さん [農工研] の案内でテフラ露頭を観察した) と合わせて、九十九里浜の砂浜の堆積物収支と海岸線移動を、供給源に向かって追いかけてみたことになる。

田村さんからは、九十九里浜平野とその周辺の相対海面変化の空間的多様性、間欠的な相対海面低下に伴い形成された構造、沖積層の粒度特性と海面変化、地中レーダ (GPR) による後浜～前浜の堆積構造の解明、砂浜の侵食・堆積と人的要因など、示唆に富む解説があった。

他にも、浜堤地形、漁村集落の発達といわし漁獲量の関係、天然ガス爆発事故 (九十九里いわし博物館・休館中) (江口誠一さん [千葉県立中央博] 案内) など、多様な話題が提供された。



写真1 九十九里浜 (作田海岸: Stop 2)。淘汰の良い細粒砂からなり、前浜の傾斜が緩い。沿岸には多段バーが発達する。日本を代表する砂浜らしい風格がある。



写真2 沖積層コア観察状況 (作田海岸: Stop 3)。九十九里浜の沖積層は堆積相解析、高密度炭素年代測定、粒度分析、GPR など多角的に研究されている。

【海浜～浅海堆積物】

九十九里浜平野の沖積層・現世堆積物（作田：Stop 3）にはじまり、香取層（表紙写真）木下（見和）層（写真3、4）と、関東東部の第四系海浜～浅海堆積物を満喫するコースが編まれた。岡崎さん、中島 礼さん[産総研]らの案内で、ご当地の代表的な露頭をみる趣向である。

地層は一見美しく、あるいは醜く、みやすく教科書的に理解できるようにも思われるが、わかったようでいて私にはさっぱりわからない。海浜～浅海堆積物は最も“わかりやすい”と思われがちだが、そうなのだろうか。堆積構造、堆積相・シーケンス、含有化石、年代、海面変化…。小林洋二先生の講義ではないが、地層の形成はあれこれ「空想」できてもほとんど検証不可能、もはや「科学」の埒をほとんど越えてしまう。しかし研究抜きの贅沢な空想も許されるのではないか。

天然の貝化石密集層（写真3、4）に続いて、目代邦康さん[自然保護助成基金]の案内で上高

津貝塚（写真5）を見学した。これは企画者の洒落なのだろう。

第四紀の地形地質が精緻に調べ上げられた観がある関東東部であるが、それでも例えば「房総半島のテクトニクス」「第四系の層序と年代」「古東京湾の消長」といった昔ながらの問題に必ずしも明快な答えが得られている訳ではない。貝塚や集落の発達と環境変遷の関係といった歴史・地理的問題、あるいは霞ヶ浦の水・生態・地形環境（納谷友則さん[産総研]・目代さん解説）のような今日的な話題も含め、総合科学的な性質を持つ第四紀学の立場から解明すべきことには事欠かない。

見学した事物や議論がいささかでも参加者の向学心を刺激したとすれば、この巡検も成功といえよう。皆さんの手で研究が進むのを楽しませてもらうとしよう。

最後に、研究の傍ら手弁当で巡検を催した案内者・事務局の皆様、参加者一同（写真6）より厚くお礼を申し上げます。



写真3 木下層（見和層）露頭（阿玉：Stop 9）。木下層最下部の貝化石密集層での採取状況。この露頭の上位にはウェーブデューン、ハンモック状斜交層理砂層、海浜堆積物などがみられる。



写真5 貝塚の剥ぎ取りの立体展示（上高津：Stop 12）。縄文時代後期の貝塚。構成種はヤマトシジミ主体で、ハマグリ、オキシジミ、サルボウなどもみられる。



写真4 化石カキ礁（崎浜：Stop 11）。木下層（層序未詳）の海進期堆積物。写真はリワークした密集層だが、一連の露頭で自生的産状のカキ化石もみられる。



写真6 集合写真（九十九里・飯岡海岸）

## シンポジウム「氷床変動とグローバルな気候変動」開催報告

東京大学大学院理学系研究科地球惑星科学専攻  
博士課程1年（横山祐典研究室）城谷和代

「氷床変動とグローバルな気候変動」と題したシンポジウムが2008年10月3日に、東京大学工学部2号館（文京区・本郷）で開催されました。当日は秋晴れのなか、平日にもかかわらず学内および学外（西は九州、北は北海道）また学部生から研究者まで幅広い層の方々の多数の参加（70名弱）をいただきました。

今回のシンポジウムは、ANU（オーストラリア国立大学）のカート・ランベック教授の来日に合わせまして開催するはこびとなりました。ランベック教授は、地球内部物理学、古気候などの研究分野で世界的に著名な方で、オーストラリア国立大学地球科学研究所にて教鞭をとっておられます。また現在ではオーストラリア科学アカデミーの会長もされています。今回のシンポジウムのご講演では、氷床変動とグローバルな気候変動を軸に、人類学的・考古学的にも重要な、ヨーロッパでの旧石器時代の氷床変動と古気候復元についても触れていただきました。

また今回のシンポジウムでは齊藤文紀氏（産総研）、川村賢二氏（極地研）、阿部彩子氏（東大）、横山祐典氏（東大）にもご講演をいただきました。氷床とグローバルな気候変動に関して、堆積物、アイスコア、モデリングなど様々な対象または手法から、お話いただきました。どのご講演においても、聴衆者との活発な議論が行われました。

3時間におよぶシンポジウム後には、ささやかながら懇親会が催されました。懇親会では、シンポジウムに引き続き30名以上の方々がご



カート・ランベック氏ご講演の様子

出席されました。今回のシンポジウムの世話人である横山祐典先生の乾杯の音頭と共に、賑やかな会場となりました。あちらこちらで研究や世間話をされているようでした。

今回のシンポジウムおよび懇親会の運営の指揮をさせていただきましたが、何事もなく、大成功のうちに締めくくることができたことは、多くの皆様のお陰かと存じます。最後になりましたが、本シンポジウムの運営を手伝ってくださった、東京大学の横山研究室の学生、PDの皆さん（阿瀬貴博氏、山根雅子女士、小泉真認氏、小林達哉氏、原田まりこ女士、安岡 亮氏、山口保彦氏、Jonathan Tyler 氏）および東京大学・工学部の宮入陽介氏に、心から御礼申し上げます。

## PIGS (Past Interglacials) ワークショップの報告

公文富士夫（古気候変動研究委員会、信州大・理）

Jerry McManus（古海洋、USA）、Chronis Tzedakis（花粉、UK）、Dominique Raynaud（氷床、仏）の3人がリーダーとなって、PAGESのもとで発足した研究プロジェクトのワークショップに参加したので、その概要を報告する。期間は2008年10月2～4日で、場所はフランス、グルノーブルの北西にあるBerninという小さな町のはずれにあるホテルに併設された会議場であった。両側にはアルプスの山々が迫り、山岳氷河が刻んだU-字谷の底に位置する場所で、トウモロコシ畑やクルミの林に囲まれた田舎である反面、すぐ隣には小規模な新興

工業団地があり、ロボット工学といった名前の看板もみられた。グルノーブルはフランスで最初の原子力発電所が作られた場所で、原子力産業を核としたハイテク産業都市であることを後から知りました。

プロジェクトは「Past Interglacials（略称PIGS）」と名付けられている。4年計画で今回は第1回目の会合。過去80万年間の間氷期を対象とし（集会での発表にはMIS 31までであったが）、6つほどの解決すべき課題が提起された。それらは会議での議論を経て、最終的には、間氷期の時間的・空間的多様性、急激な気候変

化と傾向性（高・低緯度間の連携性を含む）、温室効果ガスの過剰放出（overshoots）、軌道要素の指標、歳差と傾斜度のフェーズイング、全球および広域的な温暖化度の強度と継続期間、間氷期の継続期間と終焉、我々はある強制力から間氷期の構造を説明できるのか、というテーマとしてすすめることが、討論の最後のまとめとされた。

どの間氷期がもっとも興味深い対象か、といった議論・提案もあった。重要な指摘としては、MIS 5e は Holocene に近くてもっとも古気候情報がそろっている、MIS 11 は輻射量変動のパターンが現在に近く、また、温暖化の継続期間がもっとも長いという点でおもしろい、MIS9 は急激な温暖化が顕著であり、気温の増加に比して温室効果ガスの過剰な増加（overshoot というらしい）がある、MIS7 は間氷期になり損ねた時代だ、MIS 13 では日射量は小さいが、レスー古土壌シーケンスでは強い湿潤化（温暖化）のシグナルがある、といったことが出された。

EU を中心とする参加者 30 名の小規模なワークショップであったが、海洋、陸域、氷床、気候モデルの研究者が一同に集まったの議論は、私にとっては新鮮で、聞き応えがあった。また、前述したように課題は明確にされたが、それをどのように解決していくのか、という点は必ずしも明確でない。また、研究費の確保も課題となっているようだ。EU の強みの一つは、EPICA ドームの資料であろう。水素同位体比に基づく気温変動の資料を中心に、酸素同位体比と一体となった年代モデルを構築して、それを基軸として各種のガス濃度変化を解析して各種の議論を展開している。また、いくつかの

長い時間をカバーする海洋堆積物の資料（たとえば ODP site 980）と結びつけて全球的な議論へ発展させている。

そのような点は我々も見ならって、古気候学のいろいろの分野とその研究者が交流し、情報を共有しながら、研究成果を出していく必要があると感じた。特に、世界の流れを背景に研究することも重要なので、PIGS と歩調をとって自分では何ができるだろうか、という点を考えさせられました。

次回の集会は先に述べたのテーマ「間氷期の多様性 経時的空間的、高緯度と低緯度の相互作用」を中心に、のテーマも関連づけて、2009年8月31日から9月3日まで、ギリシャの Lesvo 島、Aegean 大学で開催されることが決まりました。



ワークショップ参加者の集合写真。会議場の2階テラスで。会議2日目に背後の山（カール地形が明瞭）に雪が降った。前列左から4人目が McManus 氏、2列目右から2人目が Raynaud 氏、最後列5人目が Tzedakis 氏。

## 改訂・新設された規約

2008年8月22日の評議員会にて、いくつかの規約が改訂・新設されました。既に掲載しました「学会賞規定」、「学会賞と学術賞選考に関する内規」の改訂のほか、「研究委員会内規」が改訂され、また新たに「経理手続き内規」が設けられました。この2つの規約を以下に掲載します。

### 日本第四紀学会 研究委員会内規

（1992年9月13日、評議員会にて決定）  
（2008年8月22日、評議員会にて一部改正）

1. 研究委員会は、会則第17条に基づく特別委員会の一種で、第四紀学の特定の研究課題についての国内・国外の情報を交換し、研究を推進するためのグループである。当分の間、国際第四紀学連合（INQUA）の研究委員会（Commission）における諸活動に対応する国内委員会としての役割を果たすほか、IPCC、IGBPなどの関連する国際組織への対応を目的に含めることとする。

2. 研究委員会の設置は、少なくとも5人以上の正会員からの申し出に基づいて、幹事会から評議員会に提案され、評議員会の承認を得るものとする。
3. 研究委員会の発足を希望する会員は、委員会名、代表者、連絡先、目的、活動予定期間、活動計画、支出計画、予想される参加者数などを文書で幹事会に申し出るものとする。
4. 研究委員会の目的を推進するために、学会は財政的に可能な範囲内で、研究委員会の活動費を4年を限度として交付する。
5. 研究委員会の任期はINQUA後の最初の評議員会から次のINQUA後の評議員会までの4年間とする。
6. 研究委員会は、集会の開催通知や活動記録などを「第四紀通信」に掲載することとし、集会は一般会員にも公開することを原則とする。
7. 研究委員会の代表者は毎年年度末までに活動報告、会計報告および次年度の活動の希望の有無を幹事会を経由して評議員会に文書として提出しなければならない。
8. 研究委員会の代表者は対応するINQUAのCommission等に活動成果などを報告するとともに、その内容をINQUA終了後に幹事会を経由して評議員会に文書として提出する。
9. 研究委員会の運営は代表者に一任するが、この内規で処理できない点については、幹事会と協議するものとする。

## 日本第四紀学会 経理事務内規

(2008年8月22日、評議員会にて決定)

### (総則)

- 1 日本第四紀学会の経理事務は、一般に公正妥当と認められる会計原則にしたがって行うものとし、その業務を株式会社春恒社(以下学会事務局という)に委託する。
- 2 本会の会計幹事および会計監査は必要に応じて経理に関する帳簿、証票書類、現金ならびに棚卸資産などを調査し、それらを主管する。
- 3 金融機関との直接取引の名義は日本第四紀学会会長名とし、新会長就任後直ちに名義変更を行う。

### (会費徴集)

- 4 会費徴集業務は、これを学会事務局に委託する。
- 5 当年度の会費の請求は年度開始の1ヶ月前(7月)に行う。ただし、会費変更の予定がある場合には、総会終了後直ちに行う。
- 6 会費未納者への督促は、原則として7月、10月、1月の年3回行う。

### (予算の編成)

- 7 収支予算案は、会計幹事によって見積られた予算資料にもとづいて幹事会で審議し、評議員会、総会の承認を経て決定する。
- 8 各担当幹事は、原則として、6月末までに次年度の事業計画および事業予算案を幹事会へ提出し予算計上について審議を行う。

### (予算管理)

- 9 予算の執行は、予算の枠内において各担当幹事の責任のもとにこれを実施する。
- 10 予算に組み込まれていない支出および予算執行時の見積りが予算を超過する支出については、幹事会で協議し決定する。
- 11 各予算を翌年に繰越して使用するときには、幹事会の承認を経て、翌年度の予算編成時にこれを加えることができる。
- 12 会計幹事および庶務幹事は会費徴集状況を把握し、必要と認められたときには、定期督促以外の督促を学会事務局に指示する。
- 13 会計幹事は、原則として年2回(12月末および6月末)およびその他必要と認める時期に、収支状況ならびに資金繰り状況に関する試算表を作成し、幹事会に財務報告を行う。

### (会計手続き)

- 14 収納金に対する領収書は、原則、会長名で発行する。
- 15 外部に対する支払は、原則として、毎月25日に締切り、翌月25日に銀行振込みをもつ

- て支払う。銀行振込みが不可能な場合のみ現金による支払いが許される。
- 16 総務関係費(印刷費、通信費、消耗品費、慶弔に伴う雑費などを含む)に属する支出については、会計監事の承認の上、支払い手続きを行うものとする。
- 17 学会事務局は当該担当幹事もしくは会計幹事の承認を得て支払を行うものとする。
- 18 学会事務局は未払金および未収金を明確に把握できるように会計処理を行なう。(決算)
- 19 決算の手続きは学会事務局が行うものとする。なおその主管は会計幹事とする。
- 20 決算の内容は総会・評議員会前の幹事会において決定する。決算の内容については会計監事の監査を受けておかなければならない。

## 日本第四紀学会講習会「大型植物化石(種実化石)の基礎知識と研究法」のお知らせ

趣旨: 日本各地の第四紀層から産出する種実化石を使って、現在の日本の植生やフロアの生い立ちについての研究や、各時代の古環境を復元する研究が行われています。これらの調査・研究には、大型植物化石の堆積環境を露頭で調べることも必要です。現地での試料の採取の仕方や、処理の仕方によっても、結果が異なってくることもあります。さらに、種実類の同定には、植物の組織についての知識が必要となり、古植生の復元には現生植物の生態を理解しておく必要があります。このように、植物化石の研究には様々な分野の知識が必要ですが、今回は野外と室内の両方で、研究に必要な基礎知識と研究法を学ぶ講習会を企画しました。

日時: 2009年1月24日(土) 13:00 - 16:00  
2009年1月25日(日) 10:00 - 16:00

場所と日程:

1月24日: 西武池袋線仏子駅改札口 13:00 集合

入間川の川沿いの前期更新世の露頭で化石の採取法の講習を行います。荒天または前日に大雨が降って増水した場合は現地での観察会を中止することがあります。その場合は、こちらにある試料を使って25日の講座を行います。

\*持ち物: 長靴(川の中に入ります)、軍手、雨具、第四紀層用ハンマー(小型つるはし)、化石を入れる小さなタッパーやプラスチックの箱、ルーペ。

1月25日: 千葉大学園芸学部(松戸キャンパス)生物実験室集合

種実化石の取り出し方、観察法、同定の仕方や、記載方法について、現生標本と実体顕微鏡を用いて講習を行います。園芸学部へはJR常磐線松戸駅より徒歩約13分。生物実験室は松戸駅側入口に入って右の1階建ての建物(<http://www.h.chiba-u.jp/access.html>)

事前登録: 必要(18名定員、先着順受付) 2日間両方とも出席できる人を優先します。第四紀学会の会員を対象としますが、申し込みが少ない場合は、非会員の参加も認めます。

申し込み先: 下記の企画担当者にeメールまたは、faxで、参加希望の旨と、1) 氏名、2) 住所、3) 電話番号(当日に連絡可能な携帯電話等)、4) eメールアドレス、を必ず記入の上、12月19日(金)まで(必着)に申しこんでください。メールの申し込みの場合は件名に必ず「第四紀学会講習会参加」と書いてください。Faxでの申し込みは百原宛と明記してください。

参加費: 500円(保険料および資料代を含む、当日集めます)

問合せ先: 〒271-8510 松戸市松戸648 千葉大学園芸学部 百原 新

TEL: 047-308-8900、 FAX: 047-308-8720 eメール: arata(at)faculty.chiba-u.jp

URL: <http://www.h.chiba-u.jp/access.html>

## 「特集」を募集しています！

日本第四紀学会編集委員会

「第四紀研究」誌では、大会シンポジウムを報告する特集号（例年3号を予定）の他に通常号に組み込んだ形の「特集」も掲載しています。第四紀学会主催シンポ、ワークショップはもちろん、それ以外の研究集会等の第四紀学のテーマに沿った特集を受け付けています。

特集論文については、通常の投稿論文と同様に編集委員会が査読と審査を行います。投稿の際は以下の点にご注意下さい。

- Ⅰ. 投稿に際して
1. 特集編集用リストの提出  
代表者は、まず、特集タイトル（仮でも可）、特集の趣旨（概要のわかる200字程度のも）の代表者名、所属、連絡先を編集委員会（幹事）にお知らせ下さい。幹事から編集用リストをお送りしますので、記入して提出して下さい。
  2. 代表者に事前に検討していただきたいこと
    - ・原稿の長さは制限されますか？  
総ページはだいたい100頁以内であれば、1冊におさまります。ただし、1つの原稿の長さはできるだけ投稿規定に準拠して下さい。規定枚数を超えた場合は超過頁代がかかります。
  3. 投稿の際は、送り状に「特集（タイトル）」投稿であることを明記して下さい。また、特に、非会員が投稿される場合は「送り状」「保証書」を忘れずにつけていただけるよう代表者はご注意下さい。

### Ⅱ. 査読

通常投稿論文と同様です。ただし、編集委員の少ない分野の特集などの場合、代表者にはかなりのサポートをお願い致します。

### Ⅲ. 掲載号とプリフェース

- ・すべての原稿の査読が順調にいくとは限りません。必ず、早い原稿と遅い原稿が出てきます。掲載は原則的に遅い原稿の受理にあわせるのですが、早い受理原稿がまつ時間が長くなり過ぎると問題です。ある程度、すべての原稿の査読状況がわかり始めたら、幹事が代表者に掲載予定号などの相談します。これ以降、仮に著者の返却が遅い場合などは連絡をしていただくなど、原稿の取りまとめに御協力下さい。
- ・完成原稿がある程度あつまった時期に、代表者には特集のプリフェースを投稿していただきます。種別はなんでもかまいませんが、通常論文と同じように、投稿 査読 審査となることを計算して、編集に間に合うように投稿をお願いします。

### Ⅳ. 非会員の方の別刷りについて

非会員の方々には当該号を1冊ずつお送りしますが、別刷り希望の方は投稿規定に準ずる（50部以上の場合のみ50部無料）ことを確認して下さい。

## 2008年度第2回幹事会議事録

日時：2008年9月15日(土) 13:00-17:00  
場所：独立行政法人極地研究所研究棟2階講義室  
出席者：町田、奥村、水野、苅谷、岡崎、三浦、百原、吾妻

### 1. 報告事項

- (1) 庶務 学生会員の更新登録状況、後援依頼について確認した。
- (2) 広報 第四紀通信(15巻5号)の準備は予定どおり。会則類の改正ならびに執筆要領の改訂の掲載について確認した。逝去会員の紙碑について依頼先と掲載号を確認した。
- (3) 渉外 7月25日に地質の日委員会が開催され、ロゴとポスターが募集されている。9月12日に地球惑星科学連合の会合が開催され、12月の法人化に向けて定款および会費について審議された。
- (4) 会計 総会資料の2008年度予算案に誤りがあり、修正したものを通信に掲載。
- (5) 編集 受理済み原稿が2編、手持ち原稿は21編。特集の募集に関して、通信への掲載と依頼原稿の超過頁代に関する記述について検討した。
- (6) 行事 大会参加者は約280人。巡検は参加者30名(10名が学生)。懇親会は赤字だったが、全体では9万円の黒字。総会委任状の回収率の問題について、メールでの回答の可否を2月の評議員会で審議することとした。その他に料金後納制度の活用(返信分は1通70円)や往復はがきの利用について検討した。
- (7) 企画 講習会を予定中。10月25日と11月8日に開催。シンポジウムについては2研究委員会から申請があった。
- (8) 学術会議 第四紀およびその層序境界について、IGCオスロ大会終了後に開催されるISCで決定され

る予定。

### (9) その他

- ・国際花粉学会が2012年9月に中央大学で開催される。
- ・ジオパーク委員会 島原/山陰海岸/糸魚川/洞爺・有珠/室戸から申請。学会としても協力するかどうか。
- ・テフラ研究委員会の国際会議について、LOC代表の長岡会員がNZのLowe氏と連絡を取り、INQUAに対してFocus Groupからプロポーザルを提出したことを確認した。
- ・研究委員会の活動計画を早急に取りまとめるとともに、支出については領収書を提出してもらうように依頼することとした。

### 2. 審議事項

#### (1) 評議員会のメーリングリスト

- ・登録者は評議員全員のほか、会員、幹事会および事務局とする。登録者全員が送受信可能にする。サーバ管理は春恒社に委託する。

#### (2) 今年度スケジュール

- ・受賞者決定の評議員会：連合大会もしくは6月にシンポジウム(研究委員会に打診)
- ・受賞者講演会：年内実施は無理なので、2月の評議員会に向けて調整。会場候補として日大100年会館が挙げられた。

#### (3) 会則改訂

- ・部分的改訂ではなく、全面的な検討が必要。整合性が取れているかどうか 専門家(弁護士)の確認を取る必要がある。
- ・名誉会員の規定を今年度中に整備することとした。

### 3. その他

- 次回日程について、11月9日(土)に開催することとした。



## 日本第四紀学会名誉会員 吉川虎雄さんのご逝去を悼んで



日本第四紀学会元会長、名誉会員、理学博士、東京大学名誉教授、吉川虎雄さんが2008年8月19日、急性肺炎のため逝去された。享年86才。ここに謹んで追悼の言葉を献じ、ご冥福をお祈りする。吉川さんは東京大学理学部地理学科を1944年に卒業され、東京女高師および御茶ノ水女子大を経て1952年に東京大学に移られ、1961年に教授となられ、1982年に同学定年退職後に名誉教授となられ、さらに東京農業大学などで教鞭をとられ、多くの地形学者を育成された。また日本地理学会会長、日本学術会議第四紀研究連絡委員会委員長、など多くの公職を歴任され、第四紀学、地形学、自然地理学の発展に貢献された。とくに日本第四紀学会に関しては創立者の一人であられた。また9学会連合の会長、南極地域観測隊会長など広い範囲で活動された。

吉川さんの御研究は、侵食小起伏面、大陸棚、現生の海岸地形などから出発して、海成段丘、海面変化と地殻変動、木曾川地域の地形発達史、海底地形、さらに南極での氷床地域の研究ときわめて多岐にわたり、研究地域は日本列島から朝鮮半島、ニュージーランドなどに及ぶ。研究成果は海外誌を含む学会誌に多数の論文を公表された。ここで強調したいのは、あるテーマで地域を変えて論ずるということよりも、論文の中に何か必ず新しい問題が含まれていたことである。たとえば「地形の逆転」、「リアス海岸やベンチの形成過程」、「地震性地殻変動区」、「火山活動と地形発達」、「削剥速度と地形形成」など、その問題が後に続く研究者への刺激になったり、または提示された問題を後に御自身が解決されたこともあるが、多数の御論文の中に常に「何か考えるべき課題」を内蔵していたことは特筆すべきことである。学会誌への論文のほかに、日本地形論（1963、共著）、新編日本地形論（1973共著）、日本の活断層（1980、共編）、Landforms of Japan（1981、共著）などの単行本、またご自分の学問観を徹底的に論じた御著書、湿潤変動帯の地形学（1985）、大陸棚とその成り立ちを考える（1997、古今書院）は地形研究者の必読の書とみなされている。吉川さんの研究は国際的にも知られ、国際第四紀学連合の海岸線研究部会では度々太平洋地域の委員長を務められた。国際第四紀研究連合、国際地形学会の名誉会員でもあられた。

吉川さんは進歩的な考えの方で、お若い時から「地理学ゼミナール」などを通じて日本地理学会の改革などに情熱的に取り組んでおられたのを学生時代の私はまぶしくあおいでいたものである。学閥にとらわれない自由な考えをお持ちで、1950～1960年代にかけて活動した「基礎地形談話会」では異なる所属の、かつ考えを異にする若い人々が毎月集ま

り、活発な自由な討論と野外巡検を楽しんだが、吉川さんはその核のお一人であった。

以下に多少個人的な追悼の気持ちを述べるのをお許しいただきたい。私は50年を越えるお付き合いの中で、吉川さんから本当に多くのことを学んだ。私にとっては恩師と申しあげたい方だが、あえて吉川さんと書かせて頂く。これは、ずっと前から、「私はあなたの教師であったわけではなく、研究者の一人としておつきあいしているのだからから、決して先生とよんではいけない」といわれたからである。吉川さんはどこまでも筋を通す方だったのである。私たちは吉川さんがお元気だった頃に吉川さんを含めた雑談で、不遜にも「虎は死して筋を残す」と冗談をいったものであるが、本当に吉川さんの御逝去をこんなに急に伺うとは思わなかった。私はいくつかの共同研究を通して、吉川さんの学問観とお人柄に深く接することができた。私がとくに啓発されたことの一つは室戸岬の海成段丘の研究を通して長期的には等速な地殻変動と、その間に繰り返された海水準変化の和として海成段丘が形成されるという成果である。氷河海面変化を地形発達の中にとり入れるこの考えは今では当たり前となっているが、当時(1960年代前半)ではきわめて新鮮な考えで、深く影響を受けた。そしてその考えを実証するためにはどういう資料を野外で求めなければならないかを連日のハードな野外調査によってたたきこまれた。この時に御一緒に仕事をできたことが私の現在の研究の基礎になっている。また、日本列島の第四紀地殻変動図の作成、Upper Mantle Projectの中での変動地形の分担など、大きなプロジェクトにたびたび誘って頂いた。知名な地殻変動研究者のGerald Lensenを紹介してくださり、私の主要な研究テーマとなったニュージーランドの変動地形研究の端緒をつくってくださったのも吉川さんである。それらの研究の企画、実施の段階で、研究目的を明確にし、正確に企画を作り、いかに実行していくかを学んだ。研究室での討論の時の吉川さん、いつも理詰めで徹底的に議論された。吉川さんの研究室に入る前には思わず衿をただしたものである。野外調査の際には速い歩調で進まれ、追いつくのが大変だった。その一方、犬がお嫌いで、犬がみえると私たちの後ろにかくれようとなさる。また吊り橋や丸木橋が大嫌いで、極力そのような場所を通るのを避けられた。そのような時にわざと私たちは意地悪して吉川さんがおどおどと渡るのをひやかしながらみていたこともある。野外調査の際のさまざまな光景がよみがえってくるが、もう再びフィールドで御一緒に歩くことはできない。

数回にわたるニュージーランドでの国際共同調査でも、その準備の仕方から整理にいたるまで多くのことを学んだ。一方でご自身の体調がすぐれなかった時には、すべてを私にまかせてくださった。吉川さんが委員長をなさる学会の委員会の委員として、あるいは国際会議の運営の共同運営者としてもしばしば御一緒に仕事をさせていただいた。吉川さんは大変正確無比で几帳面な方だったから、私はよく叱れたものである。御一緒に仕事をして帰宅前には机の上には何もなく、整然とした状態であった。私がまた雑な乱れた文字を書くたびに何回注意を受けたことであろう。論文を書きすぎて筆が荒れるのに気をつけよとのご注意も受けた。1950年代は学閥が結構強く、また性差別も顕著であった時代であるが、吉川さんは、いつも私を共同研究者として快く受け入れてくださった。そして私のミスや雑な仕事に対しては忌憚なく批判してくださった。今、そのように大事な方を失って、学会はもちろん、個人的にも大きな喪失感を抱いている。限りなく寂しいと思う。面と向かってきちんと叱ってくださる方はもうこの世におられない。しかし、長年にわたっていただいたお教えは終世の糧で、私は吉川さんから学んだことを決して忘れない。私がこのような文章を捧げることになるとは思ってもいかなかった。吉川さん、直したい文章も多々あるでしょう。相変わらずだね、と苦笑いなさっておられるでしょうか。長い間の学恩とご厚情に限りない感謝の意をこめて、ご冥福を心からお祈り申し上げます。

2008年11月5日

太田陽子

## 寒冷地形談話会12月例会のお知らせ

寒冷地形談話会の12月例会を開催します。寒冷地、山地、丘陵地に関わる地形、気候、植生などについての幅広い話題提供の場です。研究発表だけでなく、海外での写真など普段目にすることのない資料を紹介する場も設けています。専門、発表の有無に関わらず大勢の方の参加をお待ちしています。学部学生、院生の方の参加(もちろん発表も)も歓迎します。非会員の方の発表、参加も歓迎します。

1. 日時：12月13日(土) 13:00～
2. 会場：立正大学大崎キャンパス(部屋は決まり次第ご連絡します)
3. プログラム
  - (1) 講演会 13:00～14:00  
講師：関口辰夫(国土地理院)  
演題：「空中写真を活用した筋状地形の地形学的研究 - 全層雪崩と関連して - 」
  - (2) 一般研究発表・写真上映 14:10～
4. 発表申し込み  
〆切 12月4日 18:00  
申込 mseto(at)ris.ac.jp 宛に氏名・所属・発表タイトルを記したメールを送ること。

立正大学大崎キャンパスのご案内

[http://www.ris.ac.jp/guidance/cam\\_guide/osaki.html](http://www.ris.ac.jp/guidance/cam_guide/osaki.html)

研究発表、スライド上映の2つを軸としますが、特に内容に制約を設けません。活発な発表、話題提供をお願いいたします。講演時間は20分+質疑応答10分を基本としますが申込件数によって調整することがあります。

例会終了後、会場付近にて懇親会を予定しています。

発表プログラムは決まり次第、寒冷地形談話会ホームページに掲載します。

寒冷地形談話会 HP [http://blogs.yahoo.co.jp/kanrei\\_chikei](http://blogs.yahoo.co.jp/kanrei_chikei)

## 第114回深田研談話会のご案内

(財)深田地質研究所では、「地質学及びその関連分野における第一線で活躍中の研究者と、地質・地質工学関係の、特に若手技術者との相互交流の場を設け、交流を通して応用地質学・地質工学の実践と技術の向上を図る」ことを目的として、「深田研談話会」を開催しております。「深田研談話会」は技術士CPD(継続教育)履修実績として申請できます。

テーマ：「京都 地下に眠る千年の地下水脈 - 歴史都市と地下水 - 」

講師：楠見晴重氏(関西大学 工学部長・教授)

日時：2008年12月5日(金) 15:00～17:00

会場：深田地質研究所 研修ホール

談話会参加費：無料

日本酒試飲会(参加費1,000円)：

講演終了後、京都伏見の地下水で醸した日本酒の試飲会を開催します。

試飲会への参加を希望される方は、談話会申込時にその旨お知らせください。

講演内容：

古都 京都は、なぜ、世界でほとんど例がないと言っても過言ではないほど、1200年もの長い間、都として栄えることができたのか?・・・それが、「地下水」にあることを科学的に解き明かします。

一般に、文化・文明が栄える土地は大河を伴っていますが、京都にはさしたる大きな川はありませんでした。これまで20年以上にわたって、京都盆地の地下水に関する実証的ならびに解析的な研究を続けてきましたが、そこで明らかとなった研究成果と2002年にNHKと共同で行なった研究での興味深い結果を基にして、本講演ではとくに、京都盆地の豊富な地下水と京の街の発展、京の雅、さらに京の伝統産業と地下水の濃密な関わりに焦点をあてながら考察します。

いずれも

申込み方法：参加ご希望の方は、E-mailかFAXでお申込み願います。

その際、氏名・所属・連絡先(住所・電話番号)をお知らせ下さい。

申込み先：財団法人 深田地質研究所

〒113-0021 東京都文京区本駒込 2-13-12

TEL: 03-3944-8010 FAX: 03-3944-5404

E-mail: fgi(at)fgi.or.jp URL: <http://www.fgi.or.jp/>

### 第四紀通信に情報をお寄せ下さい

第四紀通信の原稿は随時受け付けております。

広報幹事：苅谷愛彦(kariya(at)isc.senshu-u.ac.jp)宛にメールでお送り下さい。

第四紀通信は奇数月上旬原稿締め切り、偶数月1日刊行予定としていますが、情報の速報性ということから、版下が完成した段階でホームページに掲載するよう努力しています。奇数月15日頃にはホームページにアップするようにしていますのでご利用下さい。

日本第四紀学会広報委員会 専修大学文学部環境地理学研究室 苅谷愛彦

〒214-8580 川崎市多摩区東三田 2-1-1 電話: 044-911-1014 Fax: 044-900-7814

広報委員：越後智雄・糸田千鶴 編集書記：岩本容子

日本第四紀学会ホームページ <http://wwwsoc.nii.ac.jp/qr/index.html> から第四紀通信バックナンバーのPDFファイルを閲覧できます。

日本第四紀学会事務局

〒162-0041 東京都新宿区早稲田鶴巻町 519 番地 洛陽ビル 3 階

E-mail: daiyonki(at)shunkosha.com

電話: 03-5291-6231

FAX: 03-5291-2176